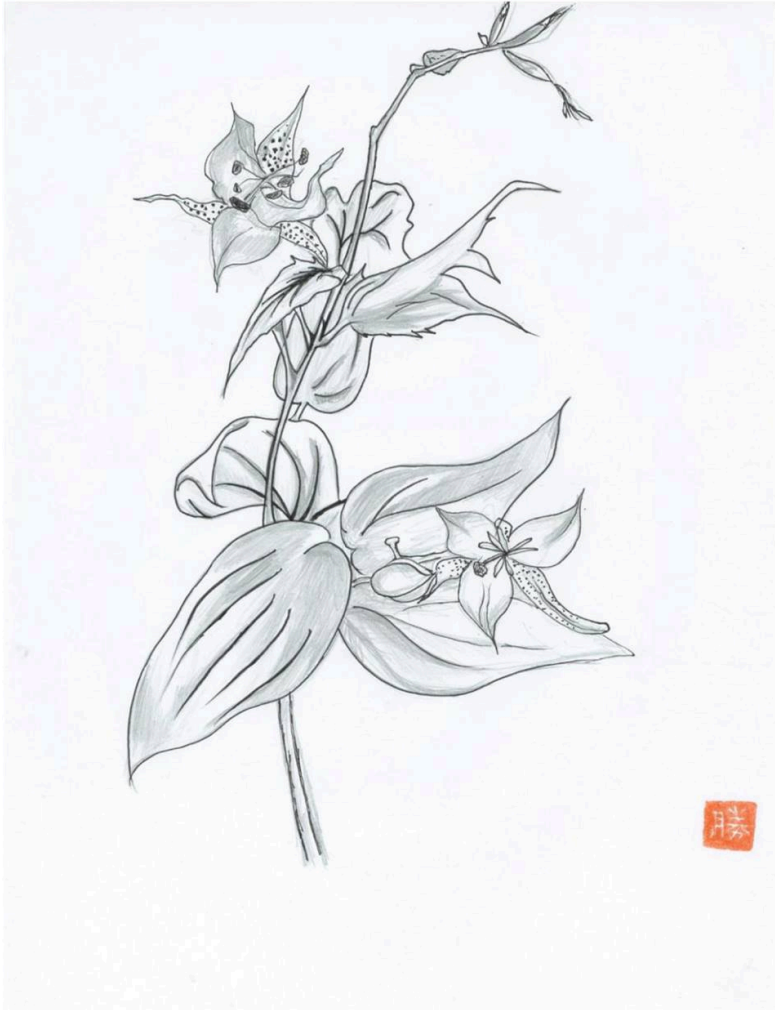


侘び寂び男子

～杜鵑草～

平成27年9月



はじめに

岡本 浩章

季節が夏から秋へと変わったにも関わらず、未だに暑い日が続きませんが、いかがお過ごしでしょうか。今回で四部目となるこの清風学園茶道部誌「侘び寂び男子」、まずは今回の部誌を発行した理由について記そうと思います。

文化祭も終わり私が今年の部誌の編集長になった時、最初にあった問題が「今年も部誌を発行するか否か」というものでした。これまで既に三部の部誌を発行していたので、ただ部誌を書いて文化祭で出すことだけが目的と化してしまい、部誌そのものの内容が疎かになってしまっているのでは、という不安があったか

らです。しかし私はより清風の茶道部を知ってもらうためにも、今年も部誌を発行したいと考えていました。

今回の部誌を発行した一番の目的は、前述の通り茶道部についてより多くのことを知ってもらいたい、というものです。男子校の茶道部という、大阪府で唯一の部活に入っていてよく聞かれるのが、「普段のお稽古では何をしているのか」と「お稽古以外の活動はどんなものがあるのか」というものでした。前者は簡単に説明することが出来ませんが、後者は一年を通じて様々な活動をしている故に、そう簡単には説明することが出来ませんでした。その口では説明しにくい、一年間の様々な活動を部誌にまとめて一年に一度

の文化祭で配布することで、多くの方々に茶道部の活動について知ってもらえれば、と考え今年も「侘び寂び男子」を発行するに至りました。

最後に、この度は清風学園茶道部誌「侘び寂び男子」を手にとっただけ、誠にありがとうございます。この部誌を通して、清風の茶道部のみならず、日本の伝統芸能である茶道にも興味をもっていただければ、と思います。それでは、茶道部の一年間にわたる活動をどうぞごゆっくりとご覧ください。

目次

1	はじめに
2	目次
3	文化祭
5	初釜に参加して
7	初釜のお菓子とお茶
10	日本の茶道の流派
11	世界のお茶 チャイについて
13	作陶体験
16	赤膚山について
18	あの日の舞台裏 NHK 取材
21	あとがき
23	平成二十五年度 部員一覧
24	表紙絵 杜鵑草(ホトトギス)について



文化祭

橋本 剛幸

茶道部の活動で最も重要で私たちが大切にしていることは、文化祭での野点(のだて)です。

私は、野点に中学生のころより参加してきました。しかし昨年度はいつもと違う状況でとても緊張してしまいました。というのも一つ上の先輩方がこの文化祭をもって引退し、高校二年生が後を引き継ぐ「代わり」が迫っていたからです。この先輩方とは、創部時からの同期や、六ヶ年の関係上入部から引退まで共に過ごした大変関わりの深い方々だったのです。さらに、私が次期部長として期待されており、終始気になっていたからです。

〽一日目(九月五日)〽

自前の着物と袴を身に包み、いざ始まった一日目。初めて経験する茶道部の出展に戸惑う新入部員に、活を入れる同級生の姿をみて、率直に頼もしいなと思いました。私自身は、着物組として呼込みやお点前、接客といった持ち場の仕事を、ペアを組んだ井上先輩と共にこなしていました。また、新しい挑戦として、お菓子の下に懐紙に見立てたカードを敷くことにし、それが好評を得たので一安心でした。

〽二日目(九月六日)〽

いよいよやってきた二日目。先輩方と今日でお別れだと思うと、身が引き締まる思いでした。二日目も沢山の方にお越し頂き、終了時刻前に



予定数を完売したのでした。その後文化祭の残り少ない時間を楽しく過ごされる先輩方が、とても大きな存在に見えました。

やがて無事に終了し、文化祭の総括に入りました。高三生一人一人がこれまでの活動の感想を述べ、代替わりの人事報告で、私が新部長として挨拶をしました。それも終わり一息ついた時、思わず号泣してしまいました。創部時のメンバーが居なくなることの悲しさ、これから上手く出来るかの不安、さらに、中学生の頃からずっと言われ続けてきた「部長」にほんとうになつた気持ち。様々なものが入り混じつての涙だったのだと思います。

入部してから今まで、本当に沢山

のことがありました。楽しかったことの方が多くですけれども、クラブに行きたくなかった時期や、先生から怒られ退部しようと思ったこともありました。それでも続けられたのは、先生と先輩方の支えがあったからに違いありません。入部時最年少だった私は、図体に合わない末っ子ポジションを確立し、中高一貫で男子校という多感な時期を、頼れる先輩方と共に過ごすことが出来ました。創部時には、部員不足に頭を抱えた事もありました。現在では次代の後輩たちが大勢います。彼等にとつて私が頼れる先輩になれるかどうか解りませんが、この六年間の集大成として、これまでの先輩方が繋いできたバトンをきちんと後輩に

渡せるように、二十七年年度の文化祭

を成功させたいと思います。



初釜に参加して

近藤 柀太

一月十二日、私は初めて年明け最初の茶会である初釜に参加しました。

まず茶室に入る前から、ほのかにお香の香りが漂ってきて、いつもとは違う独特な緊張感を持ちながら気持ち良く入ることが出来ました。

始めに桜の花を浮かべたお湯がでてきました。桜の花の味は初めてだったのですが、さっぱりとした味でとてもおいしく、香りも楽しめました。これはただ飲むために出されるのではなく、お茶をいただく前に口の中を綺麗にするためだと先生がおっしゃっていました。

そして初釜が始まりました。お席

入りをした後、お菓子をいただきました。この日のお菓子は、生菓子が牛蒡と人参の入った「花びら餅」で、干菓子はリボンの形をした飴と、未の絵馬と俵の形をした菓子でした。生菓子にはこんなものもあるのかと思いつつ食べてみると、これがとてもおいしいのです。正直、少し驚きました。干菓子はどれも可愛らしく、おいしいものでした。こうして味わっている間に、普段の稽古でもお世話になっている小西先生が抹茶を点て始められました。この日に飲む抹茶は、普段も飲んでいる薄茶と、一年に一度、この初釜の時のみ飲む濃茶の二種類でした。濃茶とは、濃さが薄茶の数倍もあり、一つの茶碗で数人分を点て、それを回し飲みする濃茶点前で点てるという

ものです。味は苦さを通り越していましたが、それでも抹茶本来のおいしさはわかり、驚き、感動しました。

その後は、薄茶をいただきましたが、先程飲んだ濃茶があまりにも苦かったためかこちらの苦しさは感じず、違和感がありました。ちなみにこの日のお茶碗の中には、今年の干支の未の絵が描かれているものや、型押しされているものがあり、お香を入れておく香合にも、未が描かれていました。こうして初釜は終わりました。私はこの初釜を通じて、抹茶本来のおいしさを再確認すると共に、多くの貴重な経験ができました。今後もここで学んだことを糧にして、よりおいしい抹茶が点えられるよう、精進していきたいとおも



います。皆様も一度、お茶の世界に
足を踏み入れてはいかがでしょう
か。



初釜のお菓子とお茶

平野 裕大

茶道をしておりますと、様々な季節感を感じます。私自身、足掛け三年茶道をたしなんできた身ですから、日々実感しております。

花、軸、あるいは炬などといったところには細かい季節がさんらんとちりばめられています。また、茶道の風物詩の中には行事としてある季節感もあります。その中には所謂正月行事といえる御初釜があります。

さてこの御初釜、皆さんはご存知でしょうか。テレビのニュース等で裏千家のお家元が京都市長、あるいは日本、京都の有力者に茶を振舞う場面がよく新年初めに報道されて

いますがまさにそのことです。

しかし、その儀礼、道具等は我々の表千家とは少々違うようですから、今からその道具や儀礼のいくつかを紹介していきます。

まず、一番明確な差とも言えるのがお菓子であります。表千家では常盤饅頭を裏千家では葩餅(はなびらもち)と言うのをいただきます。

先ず前者の常盤饅頭は碌々齋(ろくろくさい)宗匠御好の菓子だそうです。表千家のお家元では利休忌や天然忌という大切な忌日、また日頃のお稽古にも用いているそうです。そして常盤饅頭の常盤とは、千年変わらぬという松のみどりを指す言葉で、白いヤマイモの皮で白餡を緑色に染めた緑餡という物を包んで作られています。

後者の葩餅は正式には菱葩餅と

いうそうで平安時代では宮中の新年行事「齒固めの儀式」で用いるお菓子だそうです。所謂おせち料理のようにならで天皇や公家がいただくに当たります。当初は餅の上には赤い菱餅を敷き、その上に猪肉や大根、鮎の塩漬、瓜などをのせて食べていたものが、だんだん簡略化され、今のはごぼうと白味噌餡とピンク色の餅を、餅もしくは求肥(ぎゅうひ)で包んだ和菓子となっています。

初釜で葩餅が使われはじめたのは明治に入ってから、十五代続く菓子職人川端道喜(かわばたどうき)が作っていたものを、裏千家家元十一世玄々齋(げんげんさい)が初釜のときに使うことを依頼したのを期に

使われ始めたそうです。

ところで、皆さんはお抹茶と聞く
とどのようなものをご想像でしょ
うか。きっとそれは、よくお抹茶と
して茶屋などでいただける所謂薄
茶と呼ばれるものでしょう。それと
は別に主に初釜などの忌日にのみ、
いただけるお濃茶というものがあ
ります。これは薄茶の茶葉の木より
古い木から取れたお抹茶です。前述
の通り、私は三年ほど茶道をたしな
んできましたが、初釜と聞くとどう
してもこのお濃茶が思い浮かんで
きます。

さてこのお濃茶はどのようなも
のなのかというと、点てるのではな
く、練るのだそうです。はたしてお
濃茶とはいかなるものかと言うと、
まずお茶碗は通常のお茶碗より大

きめな後述します島台茶碗を使用
します。それを用い、基本二〜三人
で吸い茶という回し飲みをするた
め、お抹茶は、お棗(なつめ)ではな
く茶入れに入っており、それを一人
三杓ずつ、つまり九〜十杓ほど入れ
て練るのだそうです。

ちなみにこの吸い茶には一つ逸
話があるようです。

尾張藩士、近松茂矩の茶の湯の逸
話集『茶湯古事談』には「むかしは
濃茶を一人一服づつたてしを、其間
余り久しく、主客共に退屈なりとて、
利休が吸茶に仕そめしとなん」とあ
ります。これもまさに利休のおもて
なしの心から生まれた儀礼なので
ありましよう。

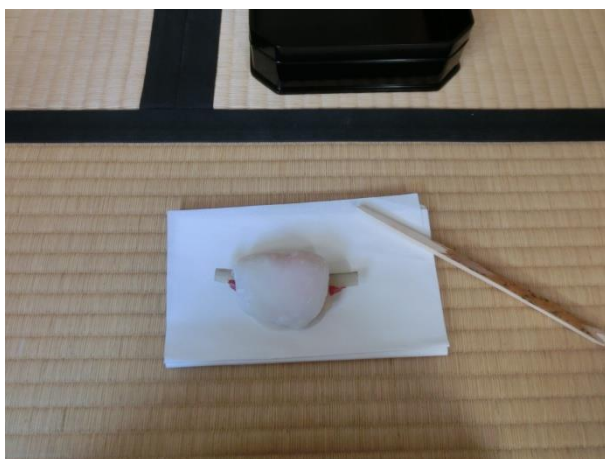
さてそんなお濃茶を入れるお茶
碗、小西先生が主に初釜などの特別

な時に用いられるのが島台茶碗で
あります。これは金塗りと銀塗りの
二個重ねでもちいる平ぼつたいお
茶碗で、金塗りは高台の形が五画で
鶴を、銀塗りが六角で亀をそれぞれ
表しているそうです。

この島台茶碗は表千家七代、如心
斎により生まれました。そして樂長
入作の最初の島台茶碗は如心斎か
ら江戸千家流の開祖、川上小白に渡
り現在も江戸千家家元に現存し、初
釜で用いられているようです。

初釜の意は字のごとく今年初め
て釜をかけると言う意味でありま
す。そして我々部員には練習初めと
いう意味もあります。茶道には季節
感があると初めに言いましたが、初
釜はその中でも一番季節感を感じ
やすいところです。それはどうやら

我々自身、毎週の練習の今年第一回
として兎に角、季節の変化をふつ
つと感じさせられます。



日本の茶道の流派

三浦 大輝

日本には、表千家、裏千家など、様々な茶道の流派があります。清風茶道部の流派は表千家なので、表千家について紹介していきます。

表千家は、茶の湯の大成者である千利休の家督を継いだ千家流茶道の本家であり、現在の家元は十四代目の而妙斎(じみょうさい)千宗左(せんそうさ)家元です。

表千家を象徴する茶室として、京都府にある、不審菴という茶室があります。これは、「不審花開今日春(いぶかしはなひらくこんにちのちはな)の語を由来としていて、「なぜ春になって花が咲くのか。自然は一切のはかりごとなく無為自然に運行

されている」という意味です。この不審菴の庭園は国指定の名勝となつています。先輩方は不審菴に見学に行った方もいるので、私も近いうちに見学に行ってみたいと思いましたが。

不審菴の庭園は国指定の名勝となつていますが、表千家には国の重要文化財に指定されているものとして、『表千家祖堂』『絹本著色千利休像』『瀬戸黒茶碗(小原木)』があります。『表千家祖堂』は、利休像を祀り、特別な茶事にのみ使われる点雪堂という茶室があります。表千家歴代の茶の理想を表現したものとして重要文化財に指定されています。『絹本著色千利休像』は、像となつていますが、絵画であり、千利休が描かれた絵として、もっともよ

く知られているものとされています。絵に作誰が筆者であるかは分かっていませんが、茶道を大成した千利休を描いた絵として重要文化財に指定されています。『瀬戸黒茶碗(小原木)』は、桃山時代に岐阜県的美濃窯で製作された瀬戸黒茶碗です。この茶碗の箱には千利休筆といわれている「小原木」という銘が記されています。和物黒茶碗を代表する作品として重要文化財に指定されています。

表千家を紹介するために、自ら詳しく表千家について調べることで、自分が習っている茶道に、長い歴史があることを改めて感じる事ができ、これからもしっかりと茶道に励んでいこうと思えました。

世界のお茶 チヤイについて

熊崎 健

世界には様々なお茶があります。

お茶には、それぞれの作法や飲み方があります。お茶はその国の歴史とともに成長してきました。つまり、お茶を知ること、その国を知ることにつながります。そこで世界のお茶の中でも比較的知名度の高いインドの「チヤイ」について書きたいと思います。

チヤイの歴史は、そんなに古くなくインドで19世紀のイギリス統治時代に、イギリスに向けて生産していた紅茶の中の「ダスト」と呼ばれる粗悪な茶葉を生かすために庶民の中から生まれました。くず茶はあまりにも苦くミルクを入れないと

飲めるものではなかったようです。チヤイとは、茶(チャ)がなまったもので、中国の茶がチベットを経由してインドにたどり着いた時に名前がチヤイとなりました。

通常チヤイとは煮出したミルクティーのことを指しますが、国によつてはミルクを入れないチヤイもあつて、茶の伝わった地域の事情によつて様々な飲み方があります。一般的なチヤイの飲み方ですが、たつぷりのミルクで粉末状の茶葉を吹きこぼれるほど煮てそこにたつぷりの砂糖と好みで、スパイスを入れて飲みます。また最近では少ないようですが、伝統的なチヤイ屋では素焼きのカップを用いてチヤイを飲みます。そしてこの素焼きのカップは決して再利用はしません。客はチ

ヤイを飲んだら、これを地面にたたきつけて割ります。この習慣は、異なるカーズト間で同じカップを用いるわけにはいかないという、浄不浄の観念によるものだそうです。

チヤイは東南アジア地域から中東、アフリカはモロッコ、トルコまで広く飲まれていますが、主流はやはりインド・ネパール・スリランカの西アジアです。インドでは、町のいたるところに売り子さんがいってチヤイが飲めるそうです。いろいろな香辛料を混ぜて粉末にしてあり、ミルクに砂糖とお茶を入れればすぐに飲めるようになっていきます。カップの底にはジャリジャリと粉がいっぱい残るそうです。インド・ネパール人にとってチヤイは生活の一部で1日に6から7杯くらい飲

むそうです。日本では、一部のカフェやカレー専門店、インターネット販売などで飲むことができます。日本でも全国的に需要はあるそうです。

これを機に世界のいろいろなお茶と文化に触れてみてはどうでしょうか。

作陶体験

岡田 最大

四月二日。この日は、朝の冷え込みとは裏腹に、昼からは少し暑すぎくらいに熱気に包まれた。そこかしこに春が顔を出し、桜はその花々を誇らしげに披露していた。やはり

桜は美しい。今も昔も日本人は桜という魔性の花に魅了されている。なぜだろう。それは、桜が様々な表情を持つているからだ。咲き始めは春の訪れを感じさせ、満開時は豪華絢爛さで人々を圧倒し、散る時はその儂さで哀愁を誘う。私は日本に生まれてきてよかったと思う。こんなに自然や文化が豊かな国は数少ない。この恵まれた環境の中で暮らしていけることに日々感謝している。

前置きが長くなってしまった…。えっ、わざとだつて！？わざとじゃないよ。書いていたら止まらなくなつたのだよ。僕は悪くない。悪いのは桜だ。断じて下心なんてない。——
—ということ、本題に入ります。

四月二日。この日に私たち茶道部の有志十数名は、作陶体験をさせてもらいに赤膚(あかはだ)焼で有名な古瀬堯三(ふるせぎょうぞう)先生のもとを尋ねた。赤膚焼については佐野くんが記述してくれているので、ここでは省略させてもらう。そこは自然豊かな場所だった。裏には赤膚山があり、そこからは周囲の景色が一望することができた。赤膚焼はその土を用いて作製される。その土は特殊で、普通の土だと融けて

しまうような高温にしても融けにくいのだ。赤膚焼については省略すると書きながら書いていくということにはどうかご容赦を。そして私たちはそのような土を用いて作陶体験をさせていただいた。私たちは全員が全員、作陶は初めてだった。そんな私たちに古瀬さんは一から懇切丁寧に教えて下さった。「本当にありがとうございます」と言いたい。

さて、本題の僕たちが行った作陶の方法を説明しよう。①紐で土台となる粘土を切り出す。②その粘土を球体になるように丸め、台の上に置き、上から円状になるようにつぶす。③粘土をてのひらで丸めながら延ばし直径1.5cmの紐状に加工する。④それを土台の円周上にくっつけ、継

ぎ目をなくすために、粘土を内側は上から下に、外側は下から上に延ばす。⑤いい感じになるまで③、④を繰り返す。⑥いい感じになったら、茶溜まり(茶碗の中心にある少しへこんだ部分)を作る。⑦完成!!という感じだ。注意点は、粘土を延ばしたりする際に空気が入らないようにすることと、少し大きめに作るということだ。前者は焼き上げる際に空気が膨張して陶器が破裂するのを防ぐためで、後者は水分等が抜けて小さくなるため気をつけなければならなかった。この部誌を読者の皆様をご覧になっている頃には僕たちが作ったお茶碗は出来上がっていると思う。しかし、部誌を書いている現在、そのことについては全く知り得ないので、完成品を見るの

が楽しみであるとともに、割れてないだろうかと少し心配したりしている。

では、作陶の感想に移ろう。まず言えることは、難しかったということだ。粘土を扱う機会は日常生活においてほとんどないだろう。僕が最後に扱ったのは小学校での工作のときだ。ほかのみんなもそんな感じだったに違いない。毎回紐の厚みを均等にしなければ、歪みができたり、穴があいたりしてしまう。実際に僕も歪んでしまい、修正するのが大変だった。だが、難しかった分だけ楽しかった。立体的なものを最初から想像して作り上げるというのは、絵を描いたりプラモデルを組み立てるのとは根本的に違う。これは自分という「内」の存在を、創作として

「外」に表現する、いわば、自分の裸をさらけ出すという行為だ。はずかしいが清々しくもある。いい経験をさせてもらった。またやってみたいと思う。

個人的な話をさせてもらおう。僕は中学の時、野球をしていた。学校のクラブではなく、ボーイズリーグという外部の機関でだ。その頃の僕は、文化部を軽視していた。たいして動き回るわけでもないし、何より活動が地味でつまらなそうだと。しかし、高校生になり、茶道部に入部した。そして、そこでいろいろなものを学んだ。それはお手前だけでなく、マナーや客人に対する気配り、日本の伝統文化についてだ。これらのことは、野球を続けていたら一生知り得なかっただろう、かけがえのないも

んでいきたい。

のだ。別に野球を否定している訳ではない。野球をして学んだことも多くある。上下関係における立ち振る舞いやチームプレーの大切さなど他にもたくさんある。しかし、茶道を知る前と後では文化に対する認識が大きく変わったのだ。それまでは、日本の伝統文化とは「過去」のものだと考えていた。だが、そうではない。日本の伝統文化は「現在」も生き続けているものなのだ、と。そして、この伝統文化を「未来」に繋いでいくのは僕たち若者の責務であると感じたのだ。だって、それを知ることですら今でも気にも留めなかった世界の美しさや壮大さを知ることができるとは。それは、人生を華やかに彩るに違いない。そうしたものを次の世代に残せるように励



赤膚山について

佐野 勝洋

私たち茶道部一同は茶道の文化に触れ合うことを目的として奈良県の赤膚山(あかはだやま)元窯の手ひねり体験をさせていただきました。

赤膚山元窯、古瀬堯三氏の歴史について説明したいと思います。

京都より赤膚山山麓五条山(現在の奈良市赤膚町五条山)に入山した赤膚山元窯の祖、初代治兵衛と伊之助が茶人としても高名な大和郡山城王柳澤保光(やなぎさわ やすみつ)侯(こと柳澤堯山(ぎょうざん)侯)の意向を受けて大和郡山藩御用窯として赤膚焼を再興したことで始まりました。

その後「中の窯(赤膚山元窯、治兵衛)を挟み「東の窯(岩蔵、勘治朗)」と「西の窯(惣兵衛)」とに分立し、赤膚三窯と呼ばれる時代を迎えました。しかし、赤膚三窯の名を誇ったのも明治二十年代で終わりを告げ半世紀後の昭和初頭には「中の窯」のみとなりました。

この事が近年まで赤膚山窯が「中の窯」と呼ばれていた由来です。

説明文ばかりで疲れた方もおられると思いますので行った際には見てもらいたい景色を紹介します。後に紹介します有形文化財に登録されている大・中型三基の登り窯の近くに登り坂があります。その登り坂の途中には私たちも使わせていただいた赤膚山元窯の土が作陶

に使えるように晒してあります。それぞれの地域によって土や使用する素材の性質が異なるために各地域によって独特の焼きものが生まれるそうです。そして登り坂を登り切ると奈良県を一望できる他、天氣の良い日には、若草山付近の天理へ京都へ続く山々の景色も望むことが出来ます。私達の行った日は快晴だったのではつきりと山々が見えました。周りを木々が囲み空気がよく静かなよい環境でした。

先程紹介しました旧作業場及び展示場の大中型三基の登り窯が、国の登録有形文化財に登録されました。

赤膚山元窯古瀬堯山には江戸後期(大型)、昭和初期(中型)、昭和後

期(小型)の三基の登り窯が陳列場及び旧作業場の後方に、南に面して右から順に並んでいます。近代化により登り窯がいかに小型化したか、歴史の変遷を見ることが出来ることと、三基全てが使用可能な状態の登り窯であることが貴重な資料であると評価されました。それに加えて、絵付け体験場として使用されている陳列場二階には西洋建築のトラス構造が用いられており、古木を組み合わせた興味深いものとなっております。登り窯と一体となって使用されている焼物生産を構成している施設の遺構として重要と評価されているのです。



あの日の舞台裏

北村 如快

皆様は、ご存知でしょうか。実はこの茶道部、四月十八日にNHKの「あはやねん、すきやねん」という番組に生中継で出たことがあるのです。周りからはかなりご好評だったこの放送、今回は、その舞台裏を記したいと思います。

四月八日、部活が終わった後、我々高三生は橋本部長の元に集まりました。我々は、そこで初めてテレビに出演することを聞かされました。すべての始まりは、四月一日に部長が送った一つのメールからでした。何か大きな思い出にとNHKに茶道部についてメールを出したところ、七日に先方から快諾のお返

事を頂いたということでした。この話を聞かされた時私は驚きのあまり、口が開いたまま硬まってしまいました。何せ、あのNHK、しかも「あはやねん、すきやねん」と言えば、関西では、有名な番組です。下手な真似は出来ません。また、当初収録は、一ヶ月後ぐらいだろうと思っていたのですが、二日後に収録は十八日と判明、本番までたった九日しかありません。そこからの日々は大変でした。

まずは、ディレクターさんとの打ち合わせから始まりました。学園長室の応接間で肅々と話は進められました。どうやら機材の関係で、普段のお稽古は撮れないらしく、そこでもいつも我々が文化祭でやっている野点の形式で撮ることになった

のです。そして、話は部員の役割分担へ。今回、レポーターの土方兄弟へお茶を点てる大役を任されたのが、副部長でした。ただ彼には大きな問題がありました。彼は、十一月に体育の授業で大怪我を負ってしまい、しばらく休部していました。そして、ようやく復帰できたのは三月の半ばとごく最近だったからです。三ヶ月以上休んでいたために彼は、作法をかなり忘れていました。彼には後に、地獄のような特訓が待っていました。

次のお稽古の次の日、高三生が集められ、副部長の特訓が行われました。副部長一人に対して指導役の小西先生と我々高三生数人が教えるという異例の態勢で進められました。何度も何度もお点前を繰り返した。

ていき、何とか調子を取り戻してきていた時には、もう始めてから二時間ばかり経っていました。その後も彼は、練習を怠らず、準備の時までイメージトレーニングを欠かしませんでした。

後日、いよいよ明日が本番という金曜日、番組進行中の動きの確認が行われました。そこで茶道部の理念である「侘び寂び男子」の紹介が組み込まれることになったのです。さて、番組で用いられた「侘び寂び男子」の毛筆の書、あれは、部内で一番の達筆である佐野君によつて書かれたものです。紹介の際に、どうしても毛筆の書が必要になり、そこで彼に白羽の矢が立ったのです。その時、長半紙を二枚与えられていたのですが、どちらも普段学園長先生

が使っているものでかなりの高級品で、無論失敗など出来ません。そんな状況の中、彼は見事に書き上げ、テレビで披露したのでした。

ついに、本番の日がやってきました。七時半に学校に着き、まずしたのは着物の着付けでした。私が、着物を最後に着たのは、七五三の時でした。（およそ十二年振りのことになりました。）やはり、着物を着ると気が引き締まる思いがしました。そして、何回かリハーサルを繰り返した後、後輩たちとじゃれあっているのも束の間いよいよ本番になりました。まず最初、テレビカメラに向かって一同があいさつをする場面があるのですが、私はこのときとんでもないミスを犯してしまったのです。緊張のあまり、レンズを見る

のを忘れてしまい、結果として私だけがやや上を見ているように映ってしまったのです。これだけは、非常に悔いが残りました。この時、私に与えられた役割は、お点前をしている副部長のすぐ後ろに立って見守ることでした。今まで、必死に特訓してきた成果を副部長が見せる番です。リハーサルの時、私は真剣に見すぎてしまい、ディレクターさんから「怖いから、もっとスマイル！」と注意されてしまいました。止むを得ず、本番で私は微笑むようにして、彼を見守っていました、彼のお点前は完璧でした。本人曰く若干お湯がこぼれたようですが、そんなことは、微塵も感じられない素晴らしいものでした。こうして収録は

幕を閉じました。

衝撃の告白から本番まで、あっという間に時間は過ぎてしまいました。だが、私はあの日々を忘れることはできないでしょう。あれ程、茶道部に関わるという機会が今までにありませんでしたが、今回の収録で私は、毎日放課後は準備のために部室や学園長室に通っていました。部室から学園長室まで道具や立札卓を運び組み立てる等、大変なものでしたが、決してそれを苦に思ったことはありません。むしろ、毎日が楽しく感じられました。私が愛した部活だからでしょう。今回の収録は、私にとって最高の思い出になりました。今回の文化祭で我々は引退しますが、悔いはありません。茶道部が後輩たちによつてますます繁栄し

ていくことを願うばかりです。最後に、今回の収録に関わった多くの皆様に厚く御礼申し上げます。誠に有難うございました。

あとがき

橋本 剛幸

部誌「侘び寂び男子」はいかがだったでしょうか。今年度の内容はページ数増だけでなく、それぞれとても濃いものだと自信を持って言えます。それは、部員の部誌に対する熱い想いを知っているからです。

私は、部長になつてすぐ「来年度誌を発行するかどうか」を部員に聞きました。低いモチベーションで取り組んでほしくなかったのと、やるからには本気でやりたかったからです。返答は「発行する」でした。そこで次に「顧問を納得させるつもりで意気込みを作文に書いてきて欲しい」と指示しました。

作文を期日までに出す事が求められる為、これで揃わなければ発行しないと決めていました。けれども、その覚悟は破られ、作文は期日に揃い、部誌に対する熱い想いを感じる事が出来ました。

抜粋ながら、ここでその意気込みを発表しようと思います。

「前年度や前々年度に書かれた先輩たちに負けないように頑張ります。」(佐野)

「部誌を発行しない事は)我が茶道部のアイデンティティーを傷つけることになるでしょう。」(平野)

「(原稿の)取り立てを厳しくする嫌われ役を喜んで買って出るだろう。なぜなら、私も部誌を愛する者の一人だからである。」(北村)

「そうした人(部誌を楽しみに待っている人)たちを落胆させたくない、絶対に満足させて、「今年も良かった」と言わせられるように期待に応えたいと思った。」(岡田)

「より多くの方が茶道部の部誌を手にとっていただき、茶道や部の活動に興味を持っていただけたら、と考えています。」(岡本)

どうでしょう。伝わりましたか？

こうして満を持して発行できたことを誇りに思います。また、小西先生・顧問の先生方のお力添えがなければ完成することが出来ませんでした。ご協力に感謝いたします。そして最後に、読者の皆さんがいるからこそ、この部誌には意味があります。読んでいただき、ありがとうございます。ございました。



部員一覽

【高三生】

三六 K	橋本 剛幸
三六 B	岡田 最大
三六 D	岡本 浩章
三六 I	北村 如快
三六 J	平野 裕大
三理 B	佐野 勝洋

【高二生】

二六 C	熊崎 健
二六 C	近藤 柊太
二六 C	谷 尚樹
二六 C	藤田 省吾
二六 E	吳原 泰智
二六 I	三浦 大輝
二六 I	吉良 大輝
二六 I	西浦 翔太

【高一生】

一六 B	財津 真生
一六 B	宮崎 隼
一六 D	前田 陽希
一六 A	仁木 甫
一六 I	大条 史恩
一六 I	田中 翔馬
一六 I	早川 慧
一文 A	仲埜 波希

【中学生】

中三 D	山本 涼太
中二 F	高田 真名斗
中二 G	玉置 和也
中二 G	鈴木 悠太
中一 B	大前 天誉





表紙絵 杜鵑草(ホトトギス)について

ユリ科の多年草で、北海道北西部から九州まで日本各地の山地に自生する。秋になると白色に紫色の斑点の散在する花をひらく。

和名である「ホトトギス」は、この花の模様が鳥のホトトギスの腹部の斑点に似ていることから名付けられた。

(絵・佐野 勝洋)